

## 平成 20 年度研究チーム活動中間報告（第 2 回目）

「大学教育における学習への動機づけ研究—甲南大学の教育効果を高めるための 1 つの試み—」

No. 106 研究幹事 藤原三枝子（国際言語文化センター）

本研究チームでは、2008 年度より、教育学的視点、社会学的視点、および言語教育研究の視点から、学際的協力によって、大学生の学習動機づけ研究を進めてきた。2009 年度は、以下に述べる個人研究を進めるとともに、研究チームとしては、関連文献の情報交換や質問紙実施に際しての協力、各自の研究テーマに関する疑問点の検討などを重ねてきた。

2009 年度の個人研究は以下のテーマを中心とした：

### 1) 「学生の学びの実態把握と教育成果に焦点を合わせた組織的學生調査ネットワークの構築」のための基礎的研究と、他大学との連携による調査の実施

甲南大学は、2009 年度に文部科学省による「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」を、同志社大学、北海道大学、大阪府立大学と連携して実施することになった。「相互評価に基づく学士課程教育充実のための創出一国公立 4 大学 I R ネットワーク」という主題で、甲南大学でも、学生に対する「学習を基本とした調査」を本学 1 年生に対して実施した。この調査データと、言文センターで実施している「CASEC スコア」調査データを使いながら、甲南大学生の「英語学習・教育」にかかわる学生の「学習動機」等について分析した。こうした分析結果と総合研究所における共同研究とのコラボレーションが実現すれば大きな成果が期待される。（平松 闊）

### 2) カナダあるいは日本に留学して、その目標言語を習得する学生たちの動機と意味づけに関する量的および質的調査

本研究では、日本語と英語の学習者の留学動機とそのコンセプトを調査分析した。それと共に、Deci & Ryan の自己決定理論の枠組みの中で、学習者の留学経験がそれぞれの自己形成にどのように反映しているのかを考察している。考察の結果、留学経験は日本語と英語の学習者について共に自己決定度の高まりをもたらし、第二言語学習と自己形成に効果的に影響することが指摘された。今回の研究と考察を通じて、日英語の学習者の留学動機のコンセプトとして、日本語には「日本語による対人関係と文化的意味空間の形成の志向性」、英語には「国際的コミュニケーション能力養成の志向性」が認められた。（原田 登美）

### 3) 教師の主観的な言語観、言語学習観、言語教育観が学習者の学習意欲形成に与える影響に関する調査

2009年度は、甲南大学を始め7つの大学で、“Start frei!”（三修社 2009年）を使ってドイツ語授業を行う教師8名に、以下の研究協力を依頼した。すなわち、8名の教師が、前期・後期それぞれ2回ないし3回、学習者に「学習記録」への記入を促し、教師側もその記録を検討しながら「授業記録」を記すというものである。筆者はこれらのデータを基に、先の教師への聴き取り調査を各学期末に実施し、教科書のコンセプトが学習の動機づけに影響を及ぼす要因を、学習者ならびに教授者双方の視点から調査・分析する。（森田昌美）

#### 4) 外国語としてのドイツ語学習の開始動機調査と、教科書のコンセプトが学習者の動機づけ形成に及ぼす影響調査

2009年度は、甲南大学で行った「ドイツ語学習開始動機」調査の分析を中心に研究を進めた。ドイツ語学習に対して、5つの潜在的動機が抽出された。また、「自己決定理論」の枠組みで実施した調査の分析では、有能感は、「内発的動機づけ」および「自律性をささえる関係性」と有意な正の相関を示した。また、「内発的動機づけ」は、「同一化調整・取り入れ的調整」と有意な正の相関を示し、「外的調整・無動機」とは有意な負の相関を示した。この調査結果は、国際言語文化センター紀要『言語と文化』14号（2010年3月発行）に発表予定である。学生へのインタビューなどによる質的調査は、2010年1月末まで継続して実施されている。（藤原三枝子）

今後は、この2年間の研究結果を総合研究所叢書に発表するために、実際にそれぞれの立場から行った調査結果を持ち寄った上で、チーム全体として調査結果を分析して、学生の学習意欲を引き出し、高め、維持するための教育の可能生を探っていきたい。